

～人権はみんなが持つもの守るもの～

川西人権協だより



編集・発行 川西市人権教育協議会 〒666-8501 川西市中央町12-1(人権推進多文化共生課内)

第37回 川西市人権教育研究大会開催

テーマ 差別の現実から深く学び、生活を高め、未来を保障する教育を確立しよう！
人と人とのつながりを大切にしながら、くらしと地域に生きる人権文化を創造しよう！

主催 川西市人権教育協議会・川西市・川西市教育委員会

期日 2025(令和7)年2月7日(金) 14:30～16:30

会場 アステ市民プラザ・アステホール(アステ川西6階)

日程 14:00 受付 ～ 14:30 分科会開始 ～ 16:30 終了



分科会1 アステホール1(入り口側)

- 就学前教育部：川西こども園 「伝われ！わたしの気持ち 知りたい！友達の思い」
～子どもの思いに寄り添い、共に育ち合う保育者集団を目指して～
- 小学校教育部：北陵小学校 「子どもたちが、主体的に学び行動できるように」
～校内サポートルームの関わりを通して～

分科会2 マルチスペース2

- 中学校教育部：緑台中学校 「校内フリースクールの運営について」
- 進路保障部：清和台中学校 「校内サポートルーム『せせらぎルーム』の取り組みについて」
- 特別支援教育部：緑台小学校・陽明小学校 「緑台中学校区特別支援学級交流会における小中連携の取り組み」

分科会3 アステホール3(奥側) 校区人権啓発部

- 緑台・陽明小学校校区人権啓発推進委員会
「知る、気付く、行動する 今年度の活動報告と課題」
- けやき坂小学校校区人権啓発推進委員会
「人権啓発推進活動における裾野を広げる取り組み ～地域ぐるみで人権を考える～」

分科会4 ルーム1

- 高校教育部：川西北陵高等学校 「3年間の人権教育の実施状況について」
- 行政部：教育推進部教育保育課 「子どもたちの意見を大切にする川西の教育」

兵人教研究大会 参加レポート

◆ 9月29日(日)第71回兵庫県人権教育研究大会中央大会が、赤穂市(赤穂市文化会館・赤穂市民会館など)で行われました。午前は全体会(特別報告)、午後からは12分科会で実践報告・討議が行われました。川西市からは、11名が参加しました。参加された方の感想から一部を紹介します。

●特別報告では、姫路市スタディーサポーター・城東町補習教室代表の金川香雪さんによる、主に姫路市在住の外国人の子どもたちの現状と、外国人の就労についてのお話でした。

外国にルーツのある子どもたちには、様々な国、そして難民として家族とともに国を脱出してきた子や、日本で生まれた子などがいて、生活環境はとても厳しく、思うように勉強が出来ないとのことでした。グウエン・ル・タン・サンのスピーチコンテストの映像が流れたのですが、「私は勉強がしたい、強くなりたい」との言葉に胸を打たれました。日本に来て何もいいことがなかった、との遺書を残して自殺してしまった男の子の話は、悲しすぎて聴くに堪えませんでした。

金川さんは、必要がなくなったら補習教室を閉めようと考えていたそうですが、まだまだ必要としている子どもたちがいるので、続けていくそうです。外国からの人々を労働力としてみるのではなく、私たちの生活を支えてくれている隣人ととらえることが必要だとの言葉を自ら言い聞かせながら、全ての国の子どもたちの夢を叶えるために、私たちに出来る事は何か?を考えさせられた講演でした。

●特別報告の金川香雪さんのお話が大変良かった。渡日した外国の子どもたちに長くかかわってこられ、日本語が不自由な子どもたちが日本の中学校に通いながらも自分の夢の実現のため高校進学をめざし懸命に努力する姿、その子どもたちに寄り添い一緒に歩いて来られた日々を丁寧に話してくださいました。

その中で、努力を重ねながらも自死にまで追い込まれてしまった子どものことがわすれられないと語られた。不合理なことがいろいろなところにあるのだと感じた。

●教職員の方が多く参加されている分科会だったため現場のリアルな話を沢山聞くことができ、

非常に勉強になった。我々PTAの話にも非常に興味深く聞いてくださり保護者の意見と教員側の意見を伝え合い学び合う大変貴重な時間となりました。

全体会については、非常に重い気持ちとなりましたが、今自分にできることは何なのか改めて考えさせられる内容でした。

●多文化共生については、市民講座で学んばかりで外国籍の方々の生きにくさを感じたばかりだった。特別報告でも単に外国人だったというだけで差別され自死に至った子の事例で哀しいことだと思った。世の中は理不尽だらけだ。法律はどうして時代の流れに鈍いんだろう、日本はどうして排他的なんだろう。海外の国々の外国人への対応がどうなのかを知りたいと思う。

分科会では施設で一見安楽に暮らせている高齢者、元気な高齢者の社会参加活動の報告だった。色々なことを「自分事として考えよう」という思いは大切だと思うし頑張っている姿に元氣はもらえたが、本当に困っている高齢者の姿は見えていない、出てこないと思った。

●「地域における自主活動」の分科会に参加した。三田市弥生地区では、民生・児童委員や学校職員の他、自治会や老人クラブから役員が出て23名ほどの方で委員会が構成され、現地学習会や講演会などの活動を継続してこられた。

地域の自治会加入率の低下や高齢化、空き家問題など川西市と共通している課題はあっても自分たちで活動をすすめられている原動力は何なのかな・・・と考えさせられた。地区によって活動の温度差はあるようだが、それぞれ特徴ある活動がなされているようである。川西市の各小学校区でも参考にできることがあるのではないかと考えた。



全人教研究大会 参加レポート

11月30日(土)12月1日(日)第75回全国人権・同和教育研究大会が、熊本県・福岡県・鹿児島県で合同開催され、『事実と実践・創造』～であうつながる「ひとなかままち」～をテーマに4つの講演、87本の実践報告と討議がなされました。

川西市から参加された5人の皆さんからの感想を紹介します。



●特別分科会第4講座 『私たちは何を知らないのか～〈ガザ〉が照射する歴史の忘却と現代世界の实像～』を拝聴して、日々新聞などで知らされるガザの状況について心を痛めていた自分としては、絶対この分科会に参加すべきだと思った。

通常のメディアでは報じられていないことが次々と明らかにされた。なんとという暴力であろう。なんとという人権侵害であるか。私は耳を目を覆いたくなるような真実を知らされた。

このジェノサイド、民族浄化、というイスラエルの蛮行を止める方法はあるのか。暴力、武器が至高の存在であるこの地域において、正義、人権は遠く忘れ去られ無意味な言葉に貶められている。

力なきもの弱きものが団結して、なにかできないだろうか。報道すべきことを報道していないメディアに疑いを持ちつつ真実を見出していく努力を自分に課す必要がある。イスラエルの建国以来続く、殺し合い、憎しみの連鎖を断ち切る方法を、一市民として考えていくことが必要である。

想像力を最大限広げてパレスチナの人々の苦しみ、痛みを感じ取るべきである。以上がこの分科会で心に強く感じた私の思いである。

●初めて、全国大会に参加させていただき、人権に対する熱い思いを持っている人がこんなにもいるんだと驚き、感動した。第4分科会で社会福祉事業を運営する法人の伊藤さんによる「外国人介護者が働きやすい職場づくり」の報告を聞いた。報告の

後には、施設で働いているインドネシアのウィンディさんにインタビューをする形で進められた。

外国人介護者を受け入れるにあたって、その国を必ず訪問し、国の歴史、国民性、宗教等を理解することに努めた。それが、相手を理解し、外国人にとっても働きやすい職場となっているようである。通訳の委託契約もしているようだ。また、今後、外国人介護者が地域とどうかかわっていくのが課題であるとも述べられていた。インタビューでは「近所の方から声をかけていただいたことが嬉しかった」と言われ、地域との関わりがとても重要であることがわかった。自分は、近所の外国人の方に声をかけることができるか、川西市でどういった連携ができるのか、と話を聞きながら考えた。また、「学校でも差別しないで欲しい。お祈りの時間があったり、断食の時期もある、それを知って欲しい」とも話された。多文化共生のヒントがたくさんあった内容であった。

●特別分科会第2講座 「来民開拓団の『真相』に学ぶ」～差別は誰の問題か～に参加した。

戦前、国策で「部落がなくなれば、部落問題は解決する」として、満州への移民が行われた。満州に移民しなくなかった人たちも多くいたようだが、自分たちの子どもの将来を考え行かれたそうである。

しかし、終戦2日後の1945年8月17日に食糧ではなく青酸カリを供給され、来民開拓団の人々は行き場を失い、276名の人々が自決された。将来のある多くの子どもたちの命が奪われた。追い詰められた人たちのことを考えると心が痛い話だった。

差別問題が、「差別される」という受け身の表現で語られるが、「される」状態が最初にあるはずがない。必ず、差別「する」という行為が先にある。と話されていた。

まさしく、そのとおりだと思う。差別は、「差別されている人たちの」問題ではなく「差別する人たち」の問題。この言葉を浸透していかなければいけないと感じた。



●輪島市立輪島中学校の報告から

輪島からの報告「おとなが子どもを守るために必要だと思うこと」～2024年能登半島地震 発災から今までとこれから～があり、その分散会に参加した。

報告では能登中学校の様子を中心に、何枚かの写真を見ながら聞いた。何枚目かの写真では、地震後、混乱する学校の復興に努めた生徒たちがやっと新学期を迎え満開の桜の木の下で笑顔で写っている場面があったが「この中の一人の生徒が、9月の水害で犠牲になったのです。」という説明には、「こんなに頑張ってきたのに…!」と、何とも言いようのない気持ちになった。

報告では、現場の状況と生徒たちの様子が語られ、印象に残る場面がいくつもあった。熊本県から派遣されていたボランティアの方(音楽の先生)が「熊本地震の恩返しなので何でもします。」と話しかけて来られ、早速、楽譜を印刷し合唱の授業をしてくださり、涙を流す生徒がいるぐらいの大合唱になったということだった。災害時の人のつながりの大切さと人がつながることで生まれるエネルギーの大きさを感じた。

また、復興に向けて、中学生として出来ることを考えようとアイデアを募り、修学旅行先の大阪の商店街で輪島の朝市の販売活動や手作り太鼓での太鼓披露などを通して交流を行った報告もあった。多くのあたたかい励ましがあり、家族を亡くした生徒、仮設住宅から通う生徒など、それぞれがいろいろな思いを抱えての活動であったが、今、自分が出来る精一杯の行動に今後の生き方に大きな経験をつかんだ機会でもあったようだ。災害の中でも、仲間と繋がり、前へ向かってその時出来る一歩を踏み出す勇気と行動にこちらが元気をもらう分散会になった。

二日間の多くの参加者の熱心な討議のまとめとして最後に司会者団が『全ての子どもたちを幸せにするための教育』を考えると、「自分自身どう生きていくのかが問われている」と結ばれた。

●「先生、諦めたらだめですよ!絶対私みたいなのがいますから!」～あせらず、諦めず、たゆまず、種を蒔いていこう～ 福岡県同教・県立折尾高等学校の報告を聞いた。

福岡県の高等学校では、朝鮮半島につながるルーツを持つ生徒たちの自主活動「朝鮮文化研究会(以下、「朝文研」)が行われており、その歴史は40年以上になり、交流会や合宿等、毎回代表生徒が企画を立て、自分たちで運営をしている。傷つけられて辛かった経験をぽつりぽつりと話始める生徒もいる。「この場なら、皆が聞いて受け止めてくれる」「ありのままの自分」でいられる場所となっている。

祖母から「親が離婚したことも、自分が在日朝鮮人であることも、絶対に誰も言ったらだめ」と厳しく言われていたAさんだったが、「折尾高校に行っていなかったら、たぶん未だに絶対誰にも話せていない。人生違ってたと思います。朝文研も、あのころは行きたくないばかりでしぶしぶやったけど、今は『本当に行ってもよかった』と言えます。後輩たちにも言って下さいよ。行けば絶対何かが変わると思います。」と報告者である松本教諭に伝える。そして、「近頃朝文研に集まる生徒が減ってきている。私たちの力不足かも」と嘆く松本教諭に「先生、諦めんでくださいよ!諦めたらだめですよ!絶対私みたいなのがいますから!」と発破をかけるまでになる。

最も印象に残ったのは、総括の際に松本教諭が言われた言葉。「報告書を書くのは大変です。書けば書くほど自分への突っ込みが入ります。あの時の自分を許せないのです。でも書かなかつたら皆さんにも会えなかった。報告書を書き、こうして報告し、本当によかったと思っています」という言葉だった。

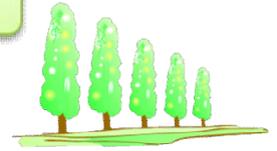
「あの時の自分が許せないのです」とは、松本教諭が「高校の時一番中が良かった友達が在日(朝鮮人)」で、その友達が在日であることを知ったのは、高校を卒業してからだった……あの時の私は「自分は差別しないよ」ってアピールするに必死だった。でも全然わかってなくて……

そして最後に、松本教諭はこう締めくくる。「失敗ばかりの毎日ですが、へこんでくじけそうになった時には、胸の中からAさんの言葉をそと取り出して触れてみます。『先生、諦めたらだめですよ!絶対私みたいなのがいますから!』」

この報告をその場で聞いたことは、人権・同和教育を担当する自治体職員として大きな収穫であった。



2024 現地人権学習会



コースの紹介

今年度は「耳塚」の見学と「ウトロ平和祈念館」に行きました。京都の歴史に学ぶ現地学習会として初めての見学先だったことから各小学校区人権啓発推進委員会からの参加希望者が多く、2日間に分けて行い、合計65名の方が参加しました。

「耳塚」は16世紀末、豊臣秀吉が、朝鮮半島に進行した文禄・慶長の役にかかる遺跡です。当時の武将は戦巧のしるしとして鼻や耳をそぎ、日本へ持ち帰ったそうです。それらはこの地に埋められ、供養の儀がもたれたといわれています。歴史の遺訓として残っている遺跡です。

「ウトロ平和祈念館」は、2022年4月にオープンした施設です。このウトロ地区は1940年から日本政府が推進した「京都飛行場建設」に集められた在日朝鮮人労働者たちの飯場跡に形成された集落です。

終戦後、帰国を希望しながらも、故郷の生活基盤がなくなっていたり朝鮮半島の混乱などがあり日本にとどまらざるをえない人々が、このウトロの地に集まって暮らすようになりました。その後も貧困や差別など様々な困難の中、地元の日本人支援者と共に「ウトロを守る会」「まちづくりプラン」などを提案し、「ウトロの土地購入のための市民募金運動」が始まりました。韓国政府が協力する中、自治体、日本政府も「ウトロ改善協議会」を発足させ、ウトロの歴史を記録し未来へとつなぐ場として「ウトロ平和祈念館」が作られました。

午前には耳塚を見学し、午後からウトロ平和祈念館での講師のお話と見学、ウトロ地区のフィールドワークなどを行いました。

～参加者の感想より～

京都ウトロ 12月17日(火)

◆耳塚のことを今回初めて知りました。ウトロ地区放火事件のことは知っていましたが、生活インフラの整備の遅れなど悲惨な生活に耐えながら地区の人々と日本人の支援を通して今日の環境整備につながったことに感銘を受けました。平和祈念館ガイドの方々の説明がとてもわかりやすく良かったです。



耳塚

◆初めて参加させて頂きました。ウトロ平和祈念館は新しくきれいで驚きましたが、その周りはそのまま。保存の意味でされているのかどうかはわかりませんが、とても違和感がありました。地区の姿は残さないでいく方が良いのでは・・・といつも思っています。みんな同じです。

◆ウトロ地区のことは全く知りませんでした。今でもその差別的なことがされていたなんてびっくりするばかりでした。「生きていたら何とかなる」「前向いて進んだら何とかなる」その言葉に感動いたしました。自分自身ももう一度差別というものをしっかり見つめ直す必要があるなあと思いました。

◆水道や土地の問題を差別や偏見の中でのりこえてこられたウトロ地区の人々を素晴らしく思いました。分断や戦争のニュースをよく聞きますが、お

互いを理解することで仲良く暮らせることを学ぶことができました。

◆ヘイトスピーチ、ヘイトクライムによる放火事件は許されないことです。差別するのではなくお互いが理解し合い、尊重する気持ちが大切です。それには事実を正しく知ることが大事で、知らない世代にも正しく伝えることが必要だと改めて感じました。歴史と意義を知ることができ本当に良かったです。

◆新しい建物は採光部が広く明るい場所で、中学生が遊びに来たりセウォール号の学生たちの似顔絵が見られたり将来に希望の持てる印象でした。一方で隣には自衛隊の施設もあり世の中は戦争がなくなる悲しい現実があります。

濃い説明の中で、侵略で国家に振り回され苦しい生活に追い込まれた人たちが強く負けずに生きてこられたことが伝わってきました。当事者だけの強さ



飯場前で

だけでなく、日本人も協力されてきたのは嬉しいことです。平和のためにこれからも知ることを大切にしていきたいと思いました。

◆ウトロ地区は戦争の時代に形づくられた日本社会から「置き去りにされた」朝鮮人のまちでした。困難に直面しながら声を上げた人々とウトロ

に寄り添ってきた日本市民、在日コリアン、そして韓国市民が協力してウトロの歴史と居住権を守った歴史は終わったこと、なかったことにはならない歴史だと思いました。・・・「悲しいことつらい



ウトロ平和祈念館

ことを経験した人は人にやさしく接することができる」との案内人の言葉が強く残りました。

◆命に別はなく大切にされ人生を歩いていくことが当たり前になるまで連帯していくこと、声をあげていくことを続けていきたいです。本当の優しさは強さ。本当の強さは優しさ。人間としての尊厳を持ち続けること、次世代へつなげていきましょう。

京都ウトロ②12月20日(金)

◆人権問題と聞くととっつきにくいイメージがあったが今日の「ウトロ平和祈念館」は明るく開かれた場所で地域の方や中学生の集いの場所になっている。人権は人と人とのつながりの中で身に付くもの備わるものかもしれないと気付かされた。

◆「ウトロ地区」は在日コリアンの人々が寄り添って暮らしている場所だと思っていました。そこには最近までライフラインのない場所で生活しなければならぬ人々がいたことが驚きです。ウトロ地区を守るために様々な立場の人が力を出した事を知り、本当に良かったと思いました。恨みやのりしり合いからは何も生み出せない、知り合い話し合うことの大切さを改めて認識しました。



フィールドワーク



飯場前で

◆先日の「人権週間映画会」の「焼き肉ドラゴン」の感動もよみ返ってきました。在日韓国人一世～三世の人々の苦労と魂の叫び、心の強さ、つらいことを乗り越え明日に向かって明るく生きていく精神を強く感じました。

◆館内のパネルや写真資料も圧巻でした。「反差別に垣根なし」の言葉が胸に刺さりました。

◆どんな境遇でも人を恨まず前向きに生きられたウトロの皆様を心から尊敬します。金さんご説明は本当に素晴らしく感動しました。現代の私たちが皆この説明を聞くのが一番良いと思います。考えが変わると思います。

◆展示も写真が中心で、説明文も丁寧でわかりやすく、当時の人たちの苦労が計り知れません。ここを見学して私たちの苦労は何だったのかと思いました。

◆飯場の屋根など「実際とは違ってきれいすぎる」というクレームがウトロ住民の人々からあったとボランティアさんが話されていました。展示されている屋根の代わりとなっていたワラや昔の写真を見て衝撃的でした。外の説明でもウトロの地域の土地が低くなった経緯と数年前の上下水道の整備の話に「ついこの前やん」と思い驚き、住民の日々の苦労が分かり、在日コリアンの皆様の強さを改めて感じました。



講話を聞く

多くの市民の方に参加していただき現地学習会が行えました。現地で学ぶこと、互いの感じ方を伝え合うことで、それぞれの方の心に何か伝わったことと思います。参加してくださったみなさん、お世話いただいた校区人権啓発推進委員長さんありがとうございました。(事務局)



☞ 「知っていますか？ 在日韓国・朝鮮人問題」(解放出版社) 他 より

Q なぜ大勢の朝鮮人が、植民地期に日本に渡ったのですか？

在日コリアンの歴史を語る上で植民地支配は欠かせないことです。

事実上日本の植民地支配が始まったとされる 1905 年、第 2 次日韓協約(乙巳条約)が締結され外交権を失った朝鮮は、1910 年「韓国併合」により正式に日本の植民地となりました。

まず日本の植民地支配が行ったことは、朝鮮の土地調査事業と産米計画でした。農耕地を奪われ、食べることに困った朝鮮の農民たちは、第 1 次世界大戦後、好況で労働力を求めていた日本へ渡るようになります。1920 年後半から 30 年代にかけて、毎年 8 万から 15 万人の朝鮮人が海を渡りました。1930 年代末には戦争による徴用、徴兵も伴い 72 万人以上が日本へ動員され、解放直後の 1945 年、朝鮮人の数は約 200 万人にも達しました。

1945 年 8 月 15 日の解放(日本敗戦)までの 36 年の植民地政策は、収奪と差別そのものでした。

**Q なぜ朝鮮人は、解放後日本に残ったのですか？**

いつか必ず、恋しい故郷に帰国することを胸に、過酷な労働にも耐えてきた朝鮮人たちは、1945 年 8 月 15 日祖国解放の喜びを迎え、雪崩を打つ勢いで帰国しました。

ポツダム宣言の受諾により降伏した日本政府は、日本人引揚船のみの片道利用策をとり、朝鮮人の帰国移送策を取りませんでした。よって博多、下関、仙崎港の埠頭には、野宿して船待ちする朝鮮人で埋まり、街路に糞尿があふれ病人が続出しました。自力で船を調達し帰国する朝鮮人もいました。このように解放後 1 年以内に帰国した朝鮮人は 130 万人に達しました。

一方、祖国朝鮮ではアメリカ・ソ連による冷戦構造で左右政治対立が激化し、北緯 38 度線を境界に南北分断という悲劇がおこりました。帰国の受入れ態勢は十分ではなく、政治・社会・経済の混乱が続き、その上、天文学的なインフレの祖国に、帰国を一時のばす朝鮮人、再び日本へ戻ってくる朝鮮人も相次ぎました。

以上のような理由で、200 万人中、帰国せず残った 70 万人の朝鮮人が日本で「在日」社会を形成するようになりました。これが戦後の「在日」の始まりです。

「かわにし人権ブックレット」の紹介

※在庫があります。その他はホームページに記載しています。

- VOL.28 水平社 100 年を経て考える人権 ～部落問題を中心に～ 関西大学人権問題研究室委嘱研究員 宮前 千雅子
- VOL.27 インターネットの部落問題 ～「無関心」でいられても「無関係」でられない～ 「反差別・人権研究所みえ」松村 元樹
- VOL.26 「ともに生きるために大切な人権意識」 わたなべメンタルクリニック 院長 渡邊 純
- VOL.25 「今日からはじまる 人権学習」～子どもが安心できる地域・家庭・学校づくり～ 大阪教育大学 佐久間 敦史
- VOL.24 「目からウロコ!人権への気づきと実行」～みんなが笑顔になるために～ 三木市人権・同和教育協議会 春川 政信
- VOL.23 『部落差別解消推進法』が成立 その意義と課題について 友永 健三
- VOL.22 人権の世間をつくる 向き合うからいっしょに取り組むへ 奥田 均
- VOL.21 出会いは心の光 ～川西緑台高等学校放送部制作「視えるということ」とともに～ 落語家 桂 福点・放送部 薄井 真晃
- VOL.20 ありのままの自分を生きる 金子(仲岡) 旬 ※現在は弁護士

【編集後記】

2024 年は、SNS の誹謗中傷、お金欲しさに闇バイト、他人を傷つける事件など毎日のように報道されている。自分勝手に他人には厳しい世の中になっているのだろうか。

自分は努力しても報われない、働いても貧しい、年金では食べていけない……という不安や喪失感。家族がない寂しさ、人に認められない、幸せそうな人がうらやましいといった感情。

そんな人々の生きづらさが自暴自棄になり事件や他人を許せない思考の背景になっているのではないだろうか。

高齢化、少子化、過疎化、物価高、異常気象、戦争など。何もかもいっしょくたにはできないが、世の中は困難にあふれていて、不安を感じる時代である。

そんな時代だからこそ、知恵を出し合い、お互いを認め合い、思いやり、誰もが豊かに生き生きと生きぬく方法を考えなければならない。

明るく希望を持って生きたい、頑張っている人を応援したい。そう願う人が多いからこそ「大谷翔平」さんの活躍が毎日のように報道されるのではないだろうか。

自暴自棄にならず、ウトロ地区の人々のように人を憎まず、誰をも受け入れ、粘り強く希望を持って生きていきたい。そう思っていることが大事なのだと思う。

(事務局)



お知らせ①



会場 キセラ川西プラザ [キセラホール]

川西市火打1丁目12番16号

- 阪急電鉄宝塚線 川西能勢口駅下車 徒歩15分
- 能勢電鉄 網延橋駅下車 徒歩5分

定員 1,000名[先着順・事前申し込み不要]

1歳半以上就学前までの一時保育先着8名まで要予約
 令和7年1月20日(月)までに川西市役所人権推進多文化共生課までお申し込みください。
 要約筆記・手話通訳あり

問い合わせ先 川西市役所人権推進多文化共生課
 TEL.072-740-1150



お知らせ②

令和6(2024)年度
 川西市ジェンダー平等推進市民企画
 企画講演会

パパは女子高生だった ~「当たり前」って何?~

参加費 無料



講師 前田 良さん(Like myself 代表)

[LGBT]「セクシュアル・マイノリティ」という言葉、一度は耳にされたことがあると思います。風見や差別を恐れ、悩み、苦しんでいる当事者の方がまだたくさんいます。「間違った知識ではなく、正しいことを伝える」ため、私の経験からお話しします。

講師プロフィール

1982年兵庫県西宮市に「女性」として生まれる。小さい頃から性に違和感を持っており、20歳のときに「性別不適合」と診断される。その後名前を変え、パートナーと出会い、性別を「男性」に戻して結婚。AID(非配偶者人工授精)により、2児を授かるも、親子関係が一時認められなかったという経験を持つ。現在は、「間違った知識ではなく、正しいことを伝える」ため、各地で講演活動を展開している。



令和7年2月22日(土)
 (2025年)
 午後1時30分~午後3時(開場/午後1時~)

会場 アステホール(アステ川西6階)

〒666-0033 兵庫県川西市栄町25-1

定員 テーマに関心のある方 100名

(先着順・事前申し込み不要)

その他 要約筆記・手話通訳あり

一時保育あり(要予約)

(1歳半以上の未就学児、先着4名)

●令和7(2025)年2月7日(金)までに川西市役所人権推進多文化共生課までお申し込みください。

お問い合わせ先:川西市役所人権推進多文化共生課 TEL.072-740-1150



お知らせ③

人権を考える市民のつどい

令和7年2月8日(土)
 (2025年)
 13時40分~16時30分(開場13時10分)

入場無料

オープニングコンサート 13:45~

津軽三味線デュオ 輝&輝

2008年に川西市出身の自衛隊員おかりさんと、愛知県出身の武田佳美さんによって結成された本格派津軽三味線デュオ。それぞれが全国大会で日本一になった経験を持ち、世界でも人気のある女性津軽三味線ユニット・伝統的な津軽三味線のスタイルである「民謡」を大切にしながら様々な音楽ジャンルを取り入れた民謡のアレンジ楽曲や、津軽三味線の奥法を存分に生かした自作で作曲するオリジナル曲。2人の個性が重なり合い、他では聴くことのできない輝&輝(KIKI)ならではの音楽を確立させている。

報告 14:25 折り鶴平和大使の活動報告

その他 人権啓発に関するポスター・冊子の展示など

司会 県立川西緑台高等学校放送委員会



講演会 15:00~

講演テーマ

「出会いこそ、生きる力」



講師 サヘル・ローズ (俳優・タレント)

イラン出身。8歳で来日し、高校生から芸能活動を始め。舞台『旗本退屈』では主演を務め、主演映画『めい』ではミラノ国際映画祭をはじめとする様々な映画祭にて賞を受賞。映画・舞台への出演だけでなく、近年では映画監督などマルチに活躍し、表現者としての活動の幅を広げている。芸能活動以外にも、個人で国内外問わず人権支援活動を続け、2020年にはアメリカで人権活動家賞も受賞。2024年には絵本とエッセイを2冊同時にリリースした。

※コンサートや講演会の開始時間は予定です。若干変更する場合がありますご了承ください。

川西市子どもの人権オンブズパーソン 2024 年次報告会

子どもの「いま」と「明日」を考えるフォーラム



2025年4月に(仮称)川西市子ども若者参加制度が制定される予定です。1999年に施行された川西市子どもの人権オンブズパーソン条例と合わせて、全ての子どもや若者の基本的人権が保障される社会の実現をめざしてつらねられたものです。とはいえ、これらの条例を活かすまわづりには、川西市子どもの人権オンブズパーソンをはじめ、多岐にわたるアクションにゆだねられています。

多岐の年次報告会では、就学前の子ども、不登校の子ども、そしてオンブズパーソンの活動で出会った「声をきかれにくい子ども」について語り合いながら、子どもの「いま」と「明日」を考える機会にしたいと思います。

2025年 3 / 22 (土) 13:15 ~ 16:45
 (開場 12:45 ~)

今年次のテーマ

「声をきかれにくい子どもの声をどうきいていくか」

#プログラム#

- ★2024 年次のオンブズパーソン活動報告 1
 - ・相談員からの報告(相談調整活動等の概要)
 - ・各オンブズパーソンからの報告(2024 年次の発言、自己発見調査及び子ども・若者参加例)

- ★2024 年次のオンブズパーソン活動報告 2
 - ・パネルディスカッション(テーマ「声をきかれにくい子どもの声をどうきいていくか」)

パネリスト: 藤原 聖紀さん (NPO法人育ちあいサポートブーク代表理事)
 井上 智美さん (多田中学校校長)
 渡邊 徹 オンブズパーソン(弁護士)
 浜田 進士 オンブズパーソン(子どもの権利 NPO 代表)
 モデレーター: 長瀬 正子 オンブズパーソン(佛教大学准教授)

会場

アステホール(アステ川西6階)
 阪急電鉄(宝塚線)・能勢電鉄(川西能勢口線) 下車 徒歩1分
 京(宝塚線)「川西能勢口」下車 徒歩3分
 ●無料の駐車場は必ずありません。公共交通機関をご利用ください

定員

先着 150 人(入場無料 申し込み不要)

●手話通訳・要約筆記あり

主催

川西市子どもの人権オンブズパーソン
 (お問い合わせ)子どもの人権オンブズパーソン事務局 川西市中央12番1号 川西市役所5階
 Tel 072-740-1235

